

日本語で学ぶ意欲を灯す理科授業 — 子供の意欲と参加が変容した日本語国際学級の指導実践 —

建部 樹 (東京都八王子市立由井第一小学校)

1. 実践の場の特徴

日本国際学級には13か国(中国・フィリピンなど)にルーツのある48名(他校38名・自校10名)の児童が通級している。他校は1回2時間、週1又は2回、自校は1回1時間、週1～4時間、1対1又は小集団で、日本語担任4名と講師2名が指導している。小集団の指導では、できる限り学年や日本語習得レベルをそろえ、在籍校が異なる場合、学習の進度にずれが生じるが、自校の年間指導計画に基づき、先行や復習をねらい学習内容を設定している。指導者は毎回の授業内容について学習指導票を作成し、これを校務支援システムで担任と共有し連携している。

2. 実践の対象と目標

2.1 対象児童

対象は他校第5学年2名(A児:バングラデシュ・来日11か月、B児:中国・来日9か月)で、週2回のうち1回はペア学習を行っている。A児は英語やジェスチャーを交えて発話し、読み書きには苦手意識がある。担任からは、「授業中にネット閲覧する等して主体的に学ぶ意欲が乏しい」と聞いていた。B児は上の空なことがあり発話が少ない。漢字から意味を推測して学習内容を一部理解することができるが、表現することには抵抗がある。2名とも日常の簡単なやりとりができるが、各教科の重要語句や学習用語を理解し、既習の語彙を使って表現することは難しい。

2.2 実践の目標

理科は、国語や社会と比べ語彙密度が低く、経験や既有知識を生かしやすい。また、観察や実験では体験的な活動と言葉を結び付けやすいため、日本語習得初・中期段階の児童であっても、事象について思考し表現する姿を引き出せると考えた。本実践では、理科の学習における日本語支援を足掛かりとして、児童の課題である学習意欲や表現力の向上を目指した。

3. 具体的な実践の内容とその過程

3.1 指導案作成の過程

実践は小学5年理科単元「流れる水のはたらき」、全12時間のうち第1時と第10時を扱い、第1時では先行学習、第10時では既習の重要語句の復習ができるようにした。通級時間90分間のうち45分間を理科授業として割いた。

単元計画: ①通級「流れる水のはたらき」→ ②③④在籍「地面を流れる水」(実験・まとめ)
→ ⑤⑥⑦在籍「川の流れとそのはたらき」→ ⑧⑨⑩在籍・通級「流れる水の量が変わるとき」
(実験・まとめ)→ ⑪在籍「川の防災」→ ⑫在籍「まとめ」

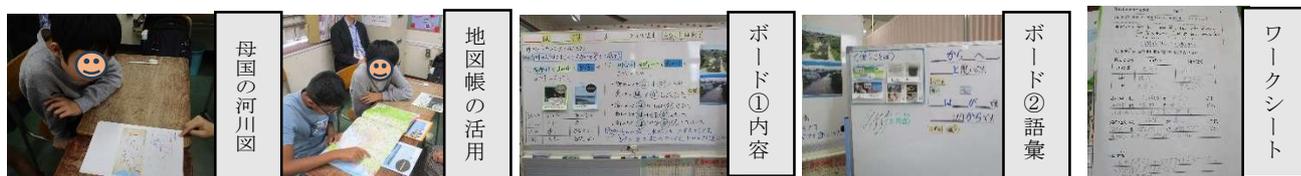
第1時の指導案は、研修の演習にて、付記の他4名と協働で作成した。児童に何を考えて欲しいかという視点を大切にして、それぞれの事前課題で作成した指導案に共通していた、比べて違いや共通点を考える活動を主軸にした。在籍学級の実験を含むすべての学習を見据え、流水のは

たらきについて問題を見出し、川の様子について気付いたことを話せること、実験で予想を立てる活動に参加できることを目標とした。実践にあたっては、対象児童の実態に応じて流れや教材を調整し、①母国の川はどちらからどちらへ流れるか考える活動、②多摩川の流域による違いを比較する活動、更に③晴天と雨天の川の様子を比較して水が濁る理由を考える活動を行った。

第10時は、学習進度の違いを考慮し、既習事項を生かして表現する活動を行うことにより内容理解を深めること、未習であれば先行して在籍の学習参加を促すことを目標として、水量の変化と流水の3つのはたらきの関係について思考し表現する活動を行った。

3.2 実践上の工夫

写真・イラスト付き学習語彙カードや表現モデルを作成し、小型ボードを使い常時参照できる提示環境を整え、児童が安心して自分の考えを表現できるようにした。母国の河川図、地図帳、教科書の写真資料の拡大を用意し、母国での経験や既有知識、学年相応の知的好奇心を引き出しながら思考と発話を促した。使う語彙・表現を載せた穴埋め式のワークシートを作成し、書くことへの抵抗感を和らげた。川の流域による違いを考える活動では、比較対象を上流と下流に絞り、内容を焦点化した。また、今後の自律的な学習を促すため、教科書のまとめを読む活動を入れた。



4. 結果と考察（目標の達成度・課題）

第1時では、初めに学習語彙を示すことで、提示された語彙や表現モデルを児童が常に手がかりにして発言する姿が見られた。母国の河川の流れを考える活動では、母国の地理の知識を生かして、川は山(高い所)から海(低い所)へ流れることを説明できた。地図帳で多摩川の流域を調べる活動では、前のめりになって分かったことを発言していた。ワークシートに書く活動では、A児はモデルに沿って穴埋めすることで書くことの負担感が軽減され、B児は書いた通り読めばよいことが分ると自信をもって挙手・発表でき、安心して表現する姿が見られた。

第10時では、それまで自分から発言することがなかった B児が在籍学級で既習の学習語彙を、未習であった A児に説明する姿が見られた。教科書のまとめを読む際、学習活動で使った資料や語彙に気付き、読むことや書くことに前向きに取り組むことができた。

更に後日、A児が自主学習で教科書の内容をまとめ、重要語句を繰り返し練習したノート3ページ分を見せてくれた。担任からも、在籍学級での学習意欲が高まったとの声があった。

付記

「外国人児童生徒等への日本語指導指導者養成研修」、「日本語指導の方法と授業づくりについて」の講義・演習で協働指導案検討を行った以下4名の先生方に感謝申し上げます。

和歌山県教育庁 紀北教育事務所 学校指導課 指導主事 小谷 祐二郎 先生

東広島市立東西条小学校 主幹教諭 初本 美帆 先生

横浜市立鶴見小学校 日本語支援拠点施設 鶴見ひまわり 日本語支援アドバイザー 川本 未央 先生

前橋市立城東小学校 教諭 日本語指導スーパーバイザー 近藤 智香子 先生

【引用文献】

教科用図書「流れる水のはたらき」『わくわく理科5』啓林館、pp.102~121